

東京岩高会報

第56号
平成26年7月12日

第57回 東京岩高会総会 総括報告

58総会案内

講演

東北の真ん中で写真日記
写真で綴る故郷の情景 土井祐之

平成二十六年 十一月二十九日（土）
午前十二時開会（上野グリーンパーク）

特集

故郷歴史探訪

茂庭綱元家と岩ヶ崎領の縁

いとしき人へ

震災から三年 復興への誓い

写真提供：土井 祐之（S54年卒）

明日に繋ぐ 繋がる同窓会



佐々木くに子
同窓会
東京支部長
(就任H20/11～)
S37年卒
鳥矢崎出身

会員の皆様には東京岩高会に変わらぬご支援ご協力を賜りまして役員一同心より感謝申し上げます。

昨年晩秋の上野公園は黄色の銀杏の葉が鮮やかな中、第57回東京岩高会総会は117名の大勢の参加者で賑わいました。本部より葛岡重利新同窓会会長始め役員4名、蘇武校長先生始め先生方4名のご出席を賜りました。

今年の特別講演は琵琶コンクール日本一の熊田かほりさん(S15卒)の琵琶演奏とお話をたっぷりと聞かせて頂きました。平家、源氏の物語の中にしっかりと誘い込まれ、会場は若い後輩にうつとりと魅了されて心地よい満場の雰囲気でした。

鶯沢工業高校同窓会との統合二年目に当たり、関係者の地道なお

声かけにより年々参加者が増えており今後に期待して力を注いで参ります。尚、総会における「還暦を祝う会」も定着しつつあり昨年は四十七年卒の年で青森、熊本より駆けつけて下さり蘇武校長先生を囲んで13名が集い話題豊富な学年の微笑ましい輪が出来ておりました。昨年に引き続き恩師清水治男先生、千葉洋先生、滝上島雄先生をお招きし尽きない思い出に花を咲かせておりました。

四十八年卒の千葉正宏さんが「来年は僕達がこの壇上を埋め尽くします」と力強い宣言をされる場面もあり篤く応援しております。また、東京岩高会は青年期を過ごした母校の友との繋がりがこよなく懐かしく、ふるさとの田園風景は父母を思いひたすら恋しくて肩を寄せ合う集いの場になっております。栗駒山を共有するそれぞれは同じ「ふるさとの同胞」として数年前より迫桜会東京支部、昨年より築館高校同窓会東京支部の役員の方々のご出席を頂き、古里の話題の輪が広がりました。新しい企画であります近隣高

校としての古くからの繋がりの歴史を感じ有意義な関係が出来ましたことに喜んでおります。

今年の二月二十八日は岩高平成二十五年度卒業生同窓会入会式、翌日三月一日は卒業式とご案内を頂き東京岩高会代表として列席させて頂きました。まだ春浅き寒気の強い日でした。

体育館には卒業生109名を前列にして全校生徒が一堂に会しておりました。二日間とも背筋を伸ばしてしっかりと話を聞く礼儀正しい姿勢は立派で高校生としての清々しさを感じ受けました。

二十八日は、同窓会葛岡重利会長より「同窓会入会歓迎」の辞があり、記念品授与の式典です。

卒業式では蘇武徳行校長先生よりの卒業証書授与でも堂々としていてさりげない立ち居振る舞いにも感動しました。

在校生から先輩方への想いのこもった「送辞」、そして「答辞」では両親、先生方、同級生そして後輩達への感謝の言葉は大震災を乗り越えた成長を感じさせる素晴らしい内容で涙を誘われました。

誇り高き厳粛な式典で御座いました。「育つ心を育てる」と地域と密着した人格形成の行き届いた教育がなされていることを生徒の現場より見せて頂き貴重な時を頂き感謝して、母校の益々の発展にエールを送ります。

今年の東京岩高会総会は十一月二十九日、上野公園グリーンパークで開催されます。皆さんのお誘い合わせの声で輪を広げてまいりましょう。



皆さん 今年もお待ちしております

▶ 昨年・第57回東京岩高会総会の受付を務められた皆様(H25年11月23日)

同窓生の輪を大きく



葛岡 重利
同窓会会長
(就任H25/8~)
S41年卒
鷺沢出身
旧鷺沢町長

栗駒山麓もいよいよ夏山シーズン到来です。

大自然を求めて、世界谷地やい
わかがみ平にも観光客の足が戻り
つつあります。

東京支部の皆さんお変わりござ
いませんか。

平成二十五年度の同窓会入会式
を二月二十八日、母校体育館にお
いて執り行いました。

東京支部の佐々木支部長様、仙
台支部の高橋支部長様にはわざわざ
ご出席を頂き、支部の活動状況
を含め歓迎のご挨拶を頂きました。
紙面をお借りし厚く御礼申し
上げます。

本年は、卒業生109名を同窓
会員として迎えることができました。
さらに学業に励む人、社会に
飛び立つ人、進む道はそれぞれ
違っても同窓の絆を大切にし、自

らの人生を切り開いて欲しいと念
願するものです。

さて、東京支部の皆さんには、
「東京岩高会」と呼び合い佐々木
支部長さんを中心に皆さんの結束
にあらためて敬意を表します。

また、素晴らしい会報を発行
し、会員相互の情報交換や活動の
様子が紹介され、紙面も年々進化
しております。編集委員に携わる
方々の並々ならぬ努力に頭が下が
ります。

一方、栗原市内の高校出身者で
組織されている各校東京支部の皆
さんとの交流も年々盛んになり、
昨年の総会では「ふるさと会」の
ような雰囲気が出てきて、同郷の絆
が一層強くなってきたことを
強く感じました。

我々同窓会の役割は、学校のた
めに、生徒のためにどんなことで
支援できるかであります。

そのためには、母校を取り巻く
環境の変化に敏感に対応できるよ
う母校との連携を密にし、同窓会
に集う同窓生の輪を大きく広げる
ことが大切だと思っています。

今まさに東京支部の皆さんの取

り組みが大きな力となっておりま
す。本部と致しましても、協力金
のご芳志をお願いできる環境づく
りに取り組んで参る所存です。
結びになりますが、来る八月二
日(土)の同窓会総会には多くの
皆さんのご参加をお待ちしており
ます。

東京支部のご発展と皆様の益々
のご活躍をお祈り申し上げご挨拶
いたします。



●壇上は母校体育館で行われた同窓会入会式
の葛岡同窓会会長(平成26年2月28日)

・・・・目次・・・

【ご挨拶】

宮城県岩ヶ崎高等学校同窓会

東京支部長

佐々木くに子 ②

会長

葛岡 重利 ③

副会長

菅原 浩紀 ④

仙台支部長

高橋 清志 ⑤

宮城県岩ヶ崎高等学校

学校長

高橋 義典 ⑥

総務部長

小畑 征也 ⑦

在校生

高橋 梨乃 ⑧

【総会報告】

第57回 東京岩高会総会

開催報告・総括

長沼幹事長 ⑨

年会費・会計報告

会計幹事 ⑬

【話の玉手箱・会員の窓】

みづな会 古希祝いの会 結城家寿子 ⑭

本部総会に参加して 長沼幹事長 ⑮

築高同窓会東京支部長 熱海 光顕 ⑯

迫桜会東京支部長 遠藤 幸治 ⑰

栗駒中学校長 伊藤富久男 ⑱

いとしき人へ 渋谷 力 ⑲

田んぼから都会の中へ 五十嵐 晃 ⑳

消えない足跡を求めて 熊田かほり ㉑

カトマンズマラソン走る 長沼 和秋 ㉒

東京岩高会に参加して 熊谷ふじえ ㉓

風流オヤジ咲く夏 岡本 浩一 ㉔

【特集】茂庭綱元家と岩ヶ崎領の縁

佐藤 正喜 ㉕

編集局 ㉖

【編集雑誌記帳】

三十五年前の 会報から



菅原 浩紀
同窓会副会長
(就任H25/8～)
栗駒郵便局長
S 5 4 年卒
栗駒出身

今回、久しぶりに卒業アルバムを開いて発見しました。

アルバムと一緒に挟んでいた卒業式次第(進路、保護者氏名入り!)と共に、そこにはなんと東京支部会報第十七号(昭和五十四年五月十八日発行)があったのです。開いてみると一ページ目は当時の伊藤末治郎支部長、小泉学校長、五十嵐同窓会長の挨拶から始まり、続くページには諸先輩方の職業観、人生観が垣間見える様々な文章が載せられておりました。

会報からは、故郷を遠く離れた社会の荒波にもまれながらも、母校を忘れず活躍される先輩方の同窓会活動にかける情熱、母

校愛、後輩への厳しくも暖かい思いやりが感じられ、温故知新という言葉が浮かび、胸が少し熱くさなりました。「同窓会活動に参加し続けてゆく事には故郷を再認識し自分の世界を広げる意義があるのだ」という支部長の挨拶には今更ながら同窓会活動の原点を気づかされました。

この懐かしい会報は、仙台に就職した私が、卒業した昭和五十四年六月の仙台支部歓迎会で頂いたものと推測されます。宮城県民会館六階ホールで撮った歓迎会集合写真もアルバムの中にあつたからです。そこには本部長と共に、東京支部長のお姿もありました。若気の至りで遠ざかっていたと思っていた同窓会に私は卒業してすぐにお世話になっていたのです。その後、故郷に帰ってから十四年、同窓会にまた顔を出すようになったのは最近のことです。昨年八月の総会で副会長の大任を受け、また我が家は叔父、叔母そして私、妻、妹、子供達と家族の多くが岩高卒業生であり、母校には人一倍お世話になっているこ

ともから、私も今更ながら伝統ある同窓会のために微力ながら貢献できたらと思っています。

昨年十一月には東京岩高会の総会にも初めて参加いたしました。幅広い年代、多数の参加者による盛大な開催に感激し、旧友とゆつくり歓談するなど期待以上の一日を楽しむことができました。

同窓生同士大いに氣勢を上げると共に前述の東京支部会報の雰囲気も感じられたように思います。

末筆ながら故郷を離れて活躍されている皆様のご健勝と東京岩高会の益々のご発展を、遠く栗駒山の麓よりお祈りするしだいです。



岩高を卒業した年に開催された同窓会仙台支部での集合写真。後列右から2番目が菅原浩紀氏。

故郷チームの応援を



高橋 清志
同窓会
仙台支部長
(就任H25/04～)
S44年卒
岩ヶ崎出身

日陰にところどころ僅かに残っていた雪も解け、また、日差しのその柔らかさに、仙台もやっと春の訪れを感じられる季節になりました。

球春到来、甲子園の選抜高等学校野球大会では高校球児が日々熱戦を繰り広げております。

東北代表の東陵高校は、大会第三日目の三月二十三日、関東代表の白鷗大足利高校と対戦、残念ながら、9対1と大差で敗れはいたしましたが、東陵高校の地元である気仙沼市民はもとより、多くの宮城県民は、被災者でもあります高校球児の健闘に、大いに励まされました。夏の高校野球での宮城県の球児の活躍を大いに期待したいと思います。

東日本大震災から三年が経過し、なお、災害復旧・復興事業が

遅々として進まず先が見えない状況の中で、被災者や避難者は不安な日々を過ごしております。

これまで、被災者や避難者に様々な支援が行われ、その全てが有意義で大きな役割を果たして参りました。その中でも、被災地でのスポーツによる被災者や避難者を元気づける取り組みは、現在の鬱積した社会状況を変える大きな力を持つことが新聞やテレビの報道等で明らかにされております。

宮城県には、プロ野球の東北楽天ゴールデンイーグルス、サッカーJ1のベガルタ仙台、プロバスケットbjリーグの89ERSと3つのプロスポーツがあります。昨シーズン素晴らしい活躍をいたしました東北楽天ゴールデンイーグルスをはじめ、地元3チームの活躍は、被災者のみならず、宮城県民をはじめ東北の人々を大いに元気づけてくれました。

今日三月二十八日は待ちかねたプロ野球開幕です。

プロスポーツだけが人々を元気づけてくれるわけではありませんが、今年も、3チームの活躍を大

いに期待し応援をさせていただきたいと思っております。

東京岩高会の皆さんも、故郷のこれらのチームを是非応援していただければと思います。

さて、私ごとになりますが、現在勤務しております宮城県住宅供給公社を三月末日で退職し、四月から、東北地方で唯一の高度小児医療専門病院であります宮城県立子ども病院に勤務することとなりました。

仙台支部長は引き続き務めますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

終わりに、東京岩高会並びに岩ヶ崎高校の益々のご発展と東京岩高会会員の皆様方のご健勝とご多幸をご祈念申し上げます。



↑ 同窓会入会式での高橋清志 同窓会仙台支部長
(H26年2月28日・母校体育館)

第58回 東京岩高会総会 開催案内

【日時】平成26年11月29日(土曜日・勤労感謝の日) 11:00開会

【場所】グリーンパーク(上野公園・西郷像傍)

【住所】東京都台東区上野公園1-59

【交通】JR & 地下鉄メトロ & 京成上野駅から 徒歩3分

【電話】03-3828-5571

【申込】同封の葉書で、9月30日迄にお申込み下さい

【会費】男性7千円、女性6千円

【講演】同窓会常任幹事 土井 祐之 (昭和54年卒・鳥沢出身) 【演目】東北の真ん中で写真日記

【問合】幹事長 長沼和秋 携帯電話:090-5339-8141 E-mail:a-naganuma@tokyo-biso.co.jp

創立七十三年目の

春を迎えて



高橋 義典

第24代学校長
(赴任H26/04～)
鶯沢出身

この四月に涌谷高校から転任して参りました高橋でございます。

同窓生の皆様には、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

また、日頃より本校の教育活動にご理解を賜り、ご支援、ご協力をいただいておりますことに深く感謝申し上げます。

これまで発行された東京岩高会報を拝見し、同窓生の皆様のふるさとへの思い、母校に対する思いに接し、とても温かい気持ちになりました。

本校に着任してひと月あまり、岩ヶ崎校舎から見える栗駒山の雄姿に元気づけられ、毎日を過ごしております。

週に二回鶯沢校舎の朝の打ち合わせに出ています。校舎から見える里山の木々も芽吹き、季節を迎え、野山の動植物にも躍動感を

感じさせる時季となりました。

さて、本校創立七十三年目の春を迎へ、111名の新入生を迎えました。

現在全校生徒353名で新しい年度がスタートしています。生徒たちはそれぞれの目標を持って毎日の授業に熱心に取り組んでいます。

また、今年で十九年目を迎えた



↑写真が趣味という校長先生の見事な構図で描き出された栗駒山の雄姿。

自学自習「愛宕塾」も四月十四日に開塾し、毎朝多くの生徒が黙々と学習に取り組んでいます。部活動にも休日も含めてひたむきに取り組む姿が見られています。

四月十九日に開催された宮城県高等学校バレーボール選手権大会において、優勝した東北高校に敗れたものの、見事ベスト8に入りました。

文武両道、自己実現に向けて日々努力する姿は誠に頼もしく、一人一人の目標実現のために、微力ながら力を尽くしたいという思いを強くしているところで

す。今後とも皆様の温かいご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、同窓生の皆様のご健勝と東京岩高会のお祈り申し上げます。挨拶とさせていただきます。

<ISO14000:2004 取得>

— 環境に思いやり —

金属スクラップ・リサイクル

株式会社 **ハガ**

栗原市栗駒中野田町西150

TEL 0228-45-3421 FAX 45-5300



↑栗原田町にある広大な敷地と工場全景
代表：芳賀 恭（S46卒・岩ヶ崎出身）

岩高二ニュース



小畑 征也
本校総務部長
(赴任H22/04～)
同窓会本部
事務局長
仙台出身

東京岩高会の会員の皆様、日頃よりお世話になっております。昨年度より本校の総務部長として同窓会事務局担当になりました小畑征也と申します。

母校の岩高の近況ですが、普通科では昨年度に続き平成二十六年度も宮城県教育委員会の進学重点学力向上事業校として県内十校の一つに、さらに、先進的英語教育充実支援事業校として県内九校の一つに指定され、進学対策や英語力の向上に努めています。

毎日の授業も在校生は熱心を受けており、早朝や放課後、長期休業中の課外指導にも取り組んでいます。小論文や面接の個別指導もきめ細やかに行われているものと自負しています。このように、生徒のそれぞれの学習スタイルや進路希望に合わせて柔軟な指導がで

きるのも、岩高の良いところだと思います。

創造工学科では、ものづくり人材育成事業として、「みやぎクラフトマン21事業」の指定を受けて、県内の企業の高度熟練技能者による実践指導が行われています。専門性の高い資格をはじめ、さまざまな資格取得にチャレンジできるように支援しています。このような取り組みもあり、昨年度の就職希望者は早々に内定をいただくことができ、卒業生全員の進路が決定しました。

ところで、昨年度四月が始まった当初は体育館が建て替えられる予定でしたが、東日本震災の復



↑愛宕塾（早朝自習会）に自主的に参加する在校生

興需要による建材費や人件費の高騰等により、県の予算内では建てられなくなり、延期になりました。かまぼこ型のレトロな体育館ですが、まだまだ十分使えますし、木造校舎時代の古い写真にも同じ体育館が写っています。長年にわたり岩高の入学式や卒業式が執り行われた体育館がもうしばらく残ることになり、少し安心しています。

同窓会の皆様の尽力により、運動部用の雨天練習場が出来ました。主に、外で活動する野球部、ソフトボール部、サッカー部、ソフトテニス部、陸上部などが使用しています。雨天時でもある程度内容のある練習ができるようになります。また、四月からは三階の空き教室にパーティション付きの机が入り、自習室が設置されました。早速生徒たちは早朝、昼、放課後などに利用しています。

昨年、東京岩高会総会で上京した折りには、同窓生の皆様から貴重な楽しいお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

同窓生の皆様が各方面でご活躍され、生き生きと談笑する姿を拝見させていただき、感慨深いものがありました。こちらに戻ってから、授業中の雑談として東京岩高会総会の様子に触れ、「いろいろな先輩方が頑張って活躍しているのだから、進学や就職で宮城県を離れてもそれぞれの道で先輩方に続いてしっかりとやりましょう」と在校生に伝えました。生徒たちには、これからも岩高生として胸を張って、誇りをもって学校生活を送ってほしいと思います。

岩高同窓生の皆様のますますのご健勝を祈念しています。

■上・岩ヶ崎高校鶯沢校舎(創造工学科)。
下・昭和56年迄の岩ヶ崎高校校舎。





↑シュートの後に響く「ゴォー~~~~ル!」の大歓声。更なる高みを目指して跳躍を。(H25/05 支部総体)



▶支部総体での剣道部の気迫みなぎる真剣勝負、一本決まり。(同・支部総体)



▶トップランナーに踊り出る定評ある岩高陸上部員。(同・支部総体)



▶特別養護老人ホーム・うぐいすの里を慰問の合唱部メンバー。(H25年12月)

キャンパス 春秋



高橋 梨乃

生徒会副会長
(H25/10~)
一迫出身
3年生

雪が降る中で行われた私たちの入学式。

「寒いね」そんな会話から高校生活が始まりました。三年前の姿は岩高の先生方にはどのようなように映ったのでしょうか。

今年も入学式が終わり、対面式、新入生オリエンテーション、部活動登録と、目まぐるしく一ヶ

月が過ぎました。五月には支部総体があります。学校生活に慣れ始めた六月にはテストが待ち受けています。岩高のテストは難しいという評判なので、しっかりと勉強しないといけない点は取れません。そのため、テスト前になると職員室前の机が生徒で一杯になります。

今年四月から、生徒の学習意欲を高めようと、自習室が開設されました。新学期早々から利用者は多く、お互いに良い刺激となっています。生徒全員が目標進路を達成できるような設備がしっかりと整備されていることが、岩高が進学校と言われる所以だと実感して

います。また、学業だけではなく部活動にも力を入れています。

昨年度はソフトボール部が県新人大会でベスト8、男子バレーボール部が県新人大会でベスト16に入るなど、好成績を残しています。文化部でも、美術部の井上悠子さんが県展で優秀賞を受賞するなどの快挙を上げています。

今年度の一年生は対面式の時から元氣と明るさが伝わってきました。先輩たちから一発芸を要求されても笑顔でこなすユーモアもあり、岩高に入学してくれて本当に嬉しく思います。

二年生は入学当初こそ大人しく

物静かなイメージでしたが、今ではすっかり岩高に慣れ、物怖じせずに分身の意見を言えるようになっていきます。そして、私たちはもう三年生になりました。もう受験生なのだと実感し、岩高生でいられる時間も短くなってきました。今できることを一所懸命にやり、昨年の先輩方に続いて良い実績を残せるように頑張っていきたいと思っています。



八月三十日(土)岩高祭に皆様で出掛けてみましょう。(編集局)

第五十七回 東京岩高会総会開催報告

第五十七回東京岩高会総会は秋
晴れの中、平成二十五年十一月二
十三日(土)午前十一時、上野公園
グリーンパークにて開催されまし
た。同窓生とご来賓の総勢百十七
名の出席を頂き昨年に引き続き百
名を超える会となりました。

本総会には、築高同窓会の役員
の方と昨年同様に迫桜高校同窓会
役員の方の出席を頂きました。

総会は五十二年卒・高橋聖幹事
の司会進行で始まり、冒頭四十六
年卒東京岩高会・後藤直幹事によ
る開会宣言が行なわれた後、就任
五年になる佐々木くに子支部長の
挨拶で幕を開きました。

ご来賓を代表して以下の二名の
方からご祝辞を頂きました。

・同窓会会長 葛岡重利様
・学校長 蘇武徳行様
出席されたご来賓の方々を紹介
致します。
(順不同・敬称略)

・同窓会本部

会長

葛岡 重利

副会長

菅原 浩紀

顧問 加藤 旭

常任幹事 佐藤 和美

常任幹事 加藤 洋

幹事 土井 祐之

監事 渋谷 建男

・岩ヶ崎高等学校

学校長 蘇武 徳行

教頭 西塚 久良

総務部長 小畑 征也

総務部 中条 文枝

総務部 古内真衣子

・恩師

清水治男、千葉 洋、滝上島雄

・迫桜高等学校同窓会東京支部

支部長 遠藤 幸治

副支部長 亀山 晶子

幹事 阿部 武寿

・築館高等学校同窓会東京支部

支部長 熱海 光顕

幹事 阿部 重一

幹事 千田 英雄

幹事 玉井 順一

本同窓会は今年で鶯沢工業高校

同窓会との統合二年目を迎え、同

校から四名の卒業生の出席を頂

き、昨年より新たな試みとして始
めた「還暦を祝う会」は、今年は
蘇武徳行校長先生と同級の四十七
年卒が対象で仙台、青森、九州の
熊本等から十三名が集いました。

本総会において、本校野球部へ
の用具の支援や、総会に茨城県産
の焼き芋を提供して戴いている四
十五年卒の後藤仁様へ蘇武校長先
生から感謝状が贈られました。

議事進行は、五十三年卒の長沼
和秋幹事長が議長に選出された
後、各担当幹事から活動報告や会
計報告並びに次年度の計画案が発
表され、採択・承認されました。

今年の特別講演は熊田かほりさ
んによる琵琶演奏で、これまで平
成十八年、平成二十一年の総会で
も琵琶演奏を行っており、第四十
六回日本琵琶楽コンクールで最年
少として第一位に輝くと共に、文
部科学大臣奨励賞、高円宮殿下記
念地域伝統芸能奨励賞などを受賞
され、平成二十五年より「みやぎ
絆大使」に就任しております。

今回は祇園精舎、那須与一、義
経より安宅、の三曲が披露されま
した。

懇親会は還暦を迎える同窓生を
代表し、四十七年卒・和久充様の
乾杯で懇親会の幕が開きました。

会場の傍らでは復興支援の一環
として、菅原由美子幹事による地
元のお米、漬物、海産物等の販売
が盛況に行なわれました。販売協
力会社は、くりこま高原ファーム
(お米めん)、数又食品(しそ巻)、
ワタナベ食品(栗駒漬)、まぼろし
製菓本舗(まぼろしのまんじゅ
う)、牡鹿半島を支援する会(生わ
かめ)の皆様方でした。

その後、鶯沢工業高校同窓生を
代表し四十九年卒の熊谷ふじえ様
の挨拶で近況報告が始まり、順次
各学年毎の報告が行われました。

恒例のジャンケン大会は、くり
こま高原ファーム・加藤洋様から
提供されたお米の抽選を行い、最
後は出席者が腕を組み合い「高校
三年生」と「ふるさと」を合唱し
た後、元応援団の卒業生による発
声で校歌斉唱を行い会は一つとな
りました。閉会の辞は東京岩高
会・佐藤政弘副会長が行い、第五
十七回東京岩高会総会は盛況の中
で散会となりました。 記・長沼

満面の笑顔で繋ぐ 岩高家族^{かい}

第五十七回 東京岩高会総会



57回

東京岩高会総会

本総会には岩高同窓生のほか、鶯沢工業高校、迫桜高校、築館高校の卒業生の皆様方、合わせて総勢 117 名のご出席を頂きました。

(2013/11/23. 上野公園西郷象前階段にて)

その昔、東京で初めて同窓会を開いた先輩達は、今日のこの同窓の広がりや熱い繋がりを予感していたでしょうか。
遥かな彼方に逝った同胞の皆様方、私達の声が聞こえますか、姿が見えますか。



平成26年度（H25/11/01～H26/10/31） **年会費ご協力者名** 敬称略 平成26年7月12日・現在 <表1>

No.	所属	号	年	氏名	No.	所属	号	年	氏名	No.	所属	号	年	氏名	No.	所属	号	年	氏名
1	賛助	S	37	斎藤 君代	41	東京	S	35	岡本 昭雄	81	東京	S	37	武田 桂子	121	東京	S	45	高橋 初美
2	賛助	S	26	飯田 正量	42	東京	S	35	小柳 典子	82	東京	S	37	太宰 東臣	122	東京	S	46	浅野 弘巳
3	本部	S	37	菅原 京子	43	東京	S	35	菅原 千恵子	83	東京	S	37	津田 久子	123	東京	S	46	石垣 悦子
4	本部	S	37	芳賀 康雄	44	東京	S	35	菅原 幸二	84	東京	S	37	宮原 ミワ子	124	東京	S	46	石田 さつ子
5	本部	S	45	後藤 仁	45	東京	S	35	須田 和恵	85	東京	S	37	結城 家寿子	125	東京	S	46	加藤 哲子
6	本部	S	61	木村 麻呼	46	東京	S	35	高橋 嘉紀	86	東京	S	37	吉川 とみ子	126	東京	S	46	狩野 美恵子
7	仙台	S	48	笠原 すみえ	47	東京	S	35	内藤 利雄	87	東京	S	37	吉野 久子	127	東京	S	46	工藤 れえ子
8	東京	S	26	伊藤 七郎	48	東京	S	35	早川 満子	88	東京	S	38	伊藤 士郎	128	東京	S	46	後藤 直
9	東京	S	26	小野寺 喜美夫	49	東京	S	36	大内 敏彦	89	東京	S	38	岩永 寿子	129	東京	S	46	佐々木 富夫
10	東京	S	26	亀井 栄利	50	東京	S	36	大久保 信子	90	東京	S	38	大関 信輔	130	東京	S	46	佐々木 勇伍
11	東京	S	26	栗原 孝允	51	東京	S	36	小畑 丈夫	91	東京	S	38	加藤 久仁雄	131	東京	S	46	佐藤 政弘
12	東京	S	26	佐竹 章	52	東京	S	36	加藤 旭孝	92	東京	S	38	佐藤 次雄	132	東京	S	46	菅原 正雄
13	東京	S	26	佐藤 明	53	東京	S	36	久保田 信子	93	東京	S	38	只野 和夫	133	東京	S	46	鈴木 富樹
14	東京	S	28	伊藤 末治郎	54	東京	S	36	佐々木 芳勝	94	東京	S	38	二川 陽子	134	東京	S	46	高村 浩子
15	東京	S	28	及川 博子	55	東京	S	36	菅原 富夫	95	東京	S	39	氏家 宣彦	135	東京	S	46	徳江 祐子
16	東京	S	28	小野寺 美代子	56	東京	S	36	千葉 圭一	96	東京	S	39	佐々木 元子	136	東京	S	46	長沢 斉
17	東京	S	28	高橋 昭三	57	東京	S	36	奈須野 栄子	97	東京	S	39	蘇武 昌三	137	東京	S	46	芳賀 進
18	東京	S	28	千葉 秀夫	58	東京	S	36	袋 幸男	98	東京	S	40	小山 ハルミ	138	東京	S	46	松元 智子
19	東京	S	28	早坂 章治	59	東京	S	36	穂積 宏哉	99	東京	S	40	桑原 盛一	139	東京	S	46	山口 純子
20	東京	S	28	吉野 玲子	60	東京	S	36	渡部 朋子	100	東京	S	40	佐藤 正喜	140	東京	S	46	山本 信子
21	東京	S	29	鎌田 匡之	61	東京	S	37	阿部 長生	101	東京	S	40	佐藤 光夫	141	東京	S	46	和仁 洋子
22	東京	S	29	佐藤 敏昭	62	東京	S	37	伊藤 克侑	102	東京	S	40	高橋 節郎	142	東京	S	47	井出 美智子
23	東京	S	29	藤代 實	63	東京	S	37	伊藤 豊	103	東京	S	40	谷川 桂子	143	東京	S	47	佐々木 静郎
24	東京	S	30	白鳥 吉幸	64	東京	S	37	岩淵 洋子	104	東京	S	41	蘇武 巖	144	東京	S	47	森岡 光子
25	東京	S	30	菅原 正八	65	東京	S	37	及川 勝美	105	東京	S	42	小川 晶平	145	東京	S	47	菅原 惇悦
26	東京	S	30	高橋 次夫	66	東京	S	37	笈川 くら子	106	東京	S	42	加藤 雅子	146	東京	S	48	千葉 正宏
27	東京	S	31	菅原 一	67	東京	S	37	小野 好延	107	東京	S	42	狩野 恒雄	147	東京	S	49	熊谷 ふじえ
28	東京	S	31	高橋 貞子	68	東京	S	37	木下 峰子	108	東京	S	42	佐藤 美喜子	148	東京	S	49	松田 清子
29	東京	S	32	河副 明子	69	東京	S	37	熊谷 栄子	109	東京	S	42	高橋 秀男	149	東京	S	49	佐々木 哲夫
30	東京	S	32	鈴木 俊之	70	東京	S	37	栗原 しげ子	110	東京	S	42	高橋 有子	150	東京	S	50	江戸 光代
31	東京	S	32	高橋 恒義	71	東京	S	37	佐々木 くに子	111	東京	S	42	千葉 健二	151	東京	S	50	佐々木 幸男
32	東京	S	32	高橋 東三	72	東京	S	37	佐藤 トミヨ	112	東京	S	42	宮本 洋子	152	東京	S	50	菅原 俊雄
33	東京	S	33	木名瀬 五百子	73	東京	S	37	真保 清美	113	東京	S	42	門伝 功	153	東京	S	52	高橋 聖
34	東京	S	33	袋 康男	74	東京	S	37	菅原 武人	114	東京	S	43	四倉 けい子	154	東京	S	53	富田 早苗
35	東京	S	34	石井 紀子	75	東京	S	37	菅原 進	115	東京	S	44	飯田 伸雄	155	東京	S	53	長沼 和秋
36	東京	S	34	清田 泰子	76	東京	S	37	菅原 三千男	116	東京	S	44	伊藤 税	156	東京	S	53	安田 文江
37	東京	S	34	小林 たか子	77	東京	S	37	鈴木 晃	117	東京	S	44	佐々木 敏行	157	東京	S	53	山口 真貴
38	東京	S	34	佐々木 賢太郎	78	東京	S	37	須田 陽子	118	東京	S	44	菅原 清喜	158	東京	S	56	阿部 豊
39	東京	S	34	四ノ宮 信男	79	東京	S	37	高橋 勝彦	119	東京	S	45	伊藤 初雄	159	東京	S	56	三浦 修
40	東京	S	34	千葉 辰夫	80	東京	S	37	高橋 道彦	120	東京	S	45	葛岡 制紀	160	東京	H	1	武内 里恵

皆様方から賜りました年会費とご寄付は、会の更なる発展のために利用させていただきます。有り難う御座いました。役員一同

第57回東京岩高会総会で可決された平成25年度決算報告と平成26年度予算案<表2～表3>

平成25年度 決算報告（H24/11/01～H25/10/31）<表2>				平成26年度 予算案（H25/11/01～H26/10/31）<表3>			
収入の部		支出の部		収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)	項目	金額(円)	項目	金額(円)
前期繰越金	150,400	総会費	1,087,670	前期繰越金	140,663	総会費	800,000
助成金	100,000	会議費	204,590	助成金	100,000	会議費	150,000
総会参加費	996,000	忘年会費	92,000	総会参加費	800,000	忘年会費	90,000
忘年会参加費	92,000	慶弔費	17,206	忘年会参加費	90,000	慶弔費	20,000
暑気払参加費	117,500	事務用品費	20,972	暑気払参加費	110,000	事務用品費	30,000
年会費協力金	516,000	通信運搬費	19,600	年会費協力金	547,040	通信運搬費	30,000
役員会費	72,000	会報発行費	363,822	役員会費	80,000	会報発行費	400,000
広告料	65,000	暑気払費	137,934	広告料	60,000	暑気払費	110,000
雑収入	147	年会費手数料	12,610			年会費手数料	10,000
ご祝儀	173,000	旅費交通費	140,000			旅費交通費	140,000
		その他手数料等	1,305				
		本部総会参加費	43,675				
		次年度繰越金	140,663				
						予備費	147,703
計	2,282,047	計	2,282,047	計	1,927,703	計	1,927,703



話の玉手箱 会員の窓

はらからの
訛りに謳う
谷地の花

結城 家寿子 S 3 7 年卒 岩ヶ崎出身 (H26/06/19, 世界谷地にて)

あの頃やんちゃだった人は、やはり活動的でユーモアたっぷり。「うーん、そうだったっけ？」と笑っています。

岩高時代はその青春期を育てて頂き、五十二年を過ぎた今も尚変わらず強く繋がっている事に感謝の気持ちでいっぱいです。

宴も中ほど、恩師岡崎智徳先生より届いた手描きの水彩画ハガキ絵「栗駒山」をクラス毎に一枚、ジャンケンで奪い合い、歓声が上がり、会は益々賑わいました。ふるさと栗駒を想い、恩師との思い出を語り、それぞれの来し方を確認し合う良いひとときでした。

二日目はニッコウキスゲ、レンゲツツジ、ワタスゲ、ウラジロヨウラクなどの咲き乱れる世界谷地の木道を渡り散策。

「この美しい大自然よいつまでも続け」と願いながら、ウグイスの声に耳を傾けました。人生七十年。子育てしながらの勤務、子供の結婚、孫の顔を見せて貰った喜びそして親の介護の話題など話は尽きませんでした。

「次の喜寿まで待てない、三年後にまた会おうよ」と笑顔で交わす握手の手が、なかなか離れませんでした。

またごきげんよう…



本部総会に参加して

長沼和秋（S53年卒）

平成二十五年度本部総会は八月三日（土）ベルディ栗駒で開催されました。

開催するにあたって、本校のホームページには今年の同窓会総会には懐かしい恩師の先生方が大集合すると掲載され、二十名の恩師のお名前があり、昭和三十六年から平成二十四年まで勤務された先生方です。

この総会では、五年間同窓会会長を務められた芳賀康雄会長から葛岡重利新会長にバトンタッチされました。また昨年からは岩ヶ崎高校と鶯沢工業高校の再編統合により、両校同窓会は一つになったこともあり、出席者は百名を越え会場も席を追加するなど、例年になく盛況となりました。

今回の出席で鶯沢工業高校同窓生の方々とお話することができたことや栗原市の市議会選挙では岩高から二名、鶯高から二名、計四名（二十六名中）選出されている

ことは、同窓会においても更なる広がりへのお力添えを得られるのだと思います。

本部の同窓会幹事は年度毎の当番制となっており、今年は「九」の付く年度でした。つまり、三十九年、四十九年、五十九年・・・の卒業生、同級会とまではいきませんが、久しぶりの同期の集まりとして、よい機会になっているようです。

偶然にもお隣に居た五十九年卒の後輩の同窓生に声を掛けてみると同級生の妹さんでした。

同窓会にはこのような思いがない人の繋がりを感じさせる場面もあります。

同窓会とは年配の方々が集まる会と話される人もおられるようですが、三年間栗駒山の麓の学び舎に通い仲間と語らい、そして部活で汗を流した事は、何か不思議なもので、年代が違っていてもどこかで繋がりを感じさせてくれる会でもあります。

次回の同窓会は、どのような繋がりを導いてくれるのでしょうか。胸が弾みます。



栗原の

柔道の仲間達



熱海 光頭

築館高等学校
同窓会
東京支部長
S 3 6 年卒

1964年の東京オリンピックを数年後に控えた1959年と1960年の二度、旧栗原郡内の4

高校から選抜された柔道の有望選手が、栗原農業高校の柔道の顧問・村山要先生（旧築中卒）の引率で三月の春休みに、一週間の予定で東京に連れてこられた。

最初の年、昭和三十四年は総勢19名の参加があり（学校の内訳は、岩高3名、栗農10名、築高

5名、若高1名）自分の食扶持の

米一人五升を持参し夜汽車で上京した。稽古は講道館を始め、宮内庁内の道場や村山先生の母校・明治大学の合宿所の道場等で、連日激しい稽古に明け暮れた。

楽しみと云えば、夕食と毎日乗る電車の窓から見る東京の景色それにお互いの高校同士の情報交換だった。

栗原の若武者達の稽古のエピソードを一つ紹介します。

私達が講道館で稽古中に、三船十段（空気投げで有名な三船久蔵先生）が小学生を相手に稽古をされている姿が目に残り、私達が先生に稽古をお願いしたところ、先生は快諾して下された。

主に小学生以下を相手にのんびり稽古をされていた先生に、我々

札儀をわきまえない、田舎者で力自慢の高校生が稽古をお願いしたので。先生は当時七十六歳のご高齢で、もう無理をされる歳ではありませんでした。

私達が技をかけると素直に投げられ、受け身を取ります。それを良い事に先生を投げ飛ばし「三船十段を投げたよ」と自慢げに仲間の所に帰ると、村山先生が強い口調で「三船十段に稽古をお願いする時は先生を投げ飛ばしてはいかん、先生が技を掛けたら投げられて受け身の稽古をするものだ」と云う事を教えました。

三船十段は、岩手県久慈市出身



遠藤 幸治

迫桜高等学校
同窓会
東京支部長
S 2 4 年卒

東京岩高会総会に

参加して

昨年十一月二十三日に開催された第五十七回東京岩高会総会に出

席させていただきまして、ありがとうございました。

いつものことながらそこに参加されている卒業生の数の多いのに驚き感動いたしました。これも佐々木くに子支部長さんを中心とされた役員の皆様方の企画とご努力の結果によるものと敬意を表しております。特に佐々木支部長さ

んは心と心のふれ合いが強く要求されるこのような会に「魚が水を得たり」のよき水であると思えます。その佐々木支部長さんの誠実さと熱意は岩高同窓生からの信頼に繋がりのような結果となつてあらわれているものと思います。

そして総会の内容も盛り沢山で最後迄、楽しませて頂きました。ㄋ

で旧制仙台の二中（仙台二高）、旧制二高（東北大学）卒と、宮城県に大変縁のある柔道家で、19

65年（昭和四十年）東京オリンピックの翌年、八十二歳でお亡くなりになりました。

また、私達を引率してくれた村山要先生は1985年（昭和六十年）七十四歳でこの世を去り、昭和三十四年、東京と一緒に来られた先生のご子息の秀之氏（若高）は、現在仙台市若林区で元氣にお過ごしです。

同じく三十四年に参加の小山智正氏（栗農）は現在、栗原市の柔道協会の会長をなされております。また、貴高校から参加されたご三方は次の方々です。

岩高三十五年卒の阿部忠雄さん、佐々木鉄哉さん、遠藤欽司さん（数年前お亡くなりになられたそうです）でした。以上、栗原市内4高校合同の柔道修行の記録をご披露させて頂きました。

最後に、貴高の会員皆様方のご健勝・ご活躍と共に貴高の益々のご発展をご祈念申し上げまして終わりと致します。

「また同窓生同志の大きな声での
楽しそうな会話や大声での笑いが
聞こえるなど、これが本当の同窓
会の姿ではないかと改めて感じさ
せられました。」

私達の迫桜高校同窓会もこれか
らは東京岩高会を見習っていかね
ばと強く感じた次第です。

次に、みなさんの母校である岩
高は県北の進学校としてその名を
馳せております。
それは私共にとってうらやまし

い限りです。岩高同窓会報などで

その進路指導などの様子が報告さ
れておりますが、その内容はすば
らしく、さすがと思わざるを得ま
せんでした。勉強合宿・早朝自主
学習の愛宕塾・出前授業・進路講
演会などのカリキュラムをたて実
施されている様子、すばらしいと
思いました。

そのなかで平成二十二年の会報
に、岩手県一関市での春期勉強合
宿の写真が掲載されておりました

が、その場所の「花夢パル」は私
が生まれた花泉町の古里にありま
す。勉強はどこでも出来ると思
いますが、場所をかえての勉強は
精神的にも異なると思います。

それが私の古里の施設をご利用
していただけたことは嬉しく私の
所属する「ふるさと花泉会」とし
てもお礼申し上げます。

終わりに皆さんの母校である岩
ヶ崎高等学校並びに東京岩高会の
益々のご発展を祈念いたします。

「最強の栗中」を 目指して



伊藤 富久男

栗原市立
栗駒中学校長

本校は、平成二十五年四月から
旧鶯沢中学校との学校再編により
「新生栗駒中学校」として生徒数
353名でスタートしました。

顧みますと、昭和四十六年岩ヶ
崎中学校と尾松中学校の統合によ
り「栗駒町立栗駒中学校」として
創立、さらに昭和四十九年、栗駒

第二中学校、文字中学校、耕英中
学校が統合されてから三十八年の
歴史を刻み、「進取 根気 奉仕」
の生活信条のもと七千余名の栗中
生を輩出しました。
代々の生徒会誌「屯が岡」を開
けば、脈々と受け継がれる「伝
統」と当時の諸活動に懸ける栗中
生の息吹が蘇ってまいります。

これまで、この素晴らしい校風
を築きあげてきた諸先輩の皆さま
に心より御礼を申し上げます。

また、沿革を辿れば、昭和六十
年代は県教委、文部省指定の研究
と公開発表が続き、まさに「栗中

の教育」の充実が図られました。

平成に入り栗駒町政四十周年を
迎え記念事業として行われた国際
交流事業では中国研修、ドイツ研
修に生徒を派遣していただくな
ど、恵まれた教育施策のもと豊か
な教育活動が展開されました。

また平成十七年の県教委指定の
「起業教育」はその後も地域の皆
さまのご支援により本校の特色あ
る教育活動として定着し、生徒達
の夢を育んでおります。

現在、生徒達は、このような地
域の皆さんのご支援に支えられ、
勉学や部活動に輝かしい成績を残

しております。そして、その誇り
を受け継ぎ「最強の栗中」を目指
し中学校の生活を送っています。
最後になりましたが、学校再編
は地域再生でもあると考えます。

これからは、地域の皆さまにご
支援をお願いするだけでなく、学
校は何かができるのか。学校が地域
に如何に関わっていくか、という
視点を持ち、学校再編を新たな学
校づくりの転換として、再編中学
校の経営を進めていかななくてはな
らないものと考えておりますの
で、今後とも新生栗駒中学校の発
展のためにお力添えを賜りますよ
うお願い申し上げます。



▶栗駒中学校から臨む岩ヶ崎高等学校と
早春の栗駒山。第76号東京岩高会報の
表紙の写真として掲載されました。
(H26年4月・土井祐之氏 撮影)

いとしき人へ 震災から三年 復興への誓い



渋谷 力

私立明成高校
非常勤講師
S46年卒
尾松出身

三回：八回：十二回……。応答もなく、留守電メッセージに切り替わることもなく、呼び出し音だけが耳に入ってくる。気を取り直し、数分後にまたダイヤルをした。彼が応答したらどう話を切り出そうか。「その後元気か？」

「家族の皆さんは？」とでも言ううか。その言葉を探ることが私の気を一層重くした。呼び出し音だけがただ空しく繰り返し鳴るだけだった。2013年9月14日、

復興モニュメント「輝く人」・高さ約9m。
石巻出身の金属造形作家・伊藤嘉英様作
宮城県石巻市中瀬公園に建立（石ノ森漫画館前）



仙台通勤の帰路で思い立って連絡を試みたが今回も甲斐がなかった。彼への電話を最初に試みたのは三年前の東日本大震災発生五ヶ月後の夏、その時も応答はなかった。その後も何度か連絡を試みたが空しく終わった。思いを断ち切れず最後に携帯電話を鳴らした2013年9月14日は、河北新報に掲載された彼に関する記事に目を引き付けられた日の二日後だった。そして、2014年3月11日、あの忌まわしい東日本大震災から三年の歳月が流れた。

彼の名前はM男。彼との思い出は深く深いものがあると思っている。一口に言って爽やかな人物だ。私が教員としてスタートを切った高校の硬式野球部監督と甲子園を目指す球児との付き合いが縁で今日まで至っている。M男も、そろそろ五十歳を数える頃だろうか。彼の高校卒業後の人生は波瀾万丈、紆余曲折しながらも自分の心に偽ることなく生きてきた人間だと思う。やつとの思いで築きあげた家族との慎ましい暮らしは人が羨むものだったろう。そして、2011年3月11日。

て、2011年3月11日。
M男は、北上川河口から約2キロ上流付近、石巻市北上町十三浜の自宅に妻、三人の娘、両親と住んでいた。東日本大震災発生の後、M男の母親と長女のS子さん（当時十二歳、小学六年）が押し寄せた津波にのまれ、三ヶ月後に母親は遺体で見つかった。Sさんは行方不明のまま。自宅は北上川をさかのぼった津波で流失。一ヶ月後に、父親を仮設住宅に残し、妻と二人の娘を単身赴任先の仙台に呼び寄せた。残された二人の娘のため、仕事に没頭した。時間が過ぎれば悲しみは癒える、そう思ったが薄らぐことはなかった。

暮らしの中でふとした拍子に思い出す長女のイメージはより鮮明になり、その屈託のない笑顔が目には浮かぶ。見つけてやれない悔しさが自分を責めるばかりである。

2011年7月に死亡届けを提出し、葬儀も済ませた。死を認めることに大きな戸惑いを感じつつ割り切ったという。東日本大震災から二年半となった今も、毎週のように自宅のあった石巻市北上町に足を運び長女のSさんの姿に思いを馳せている。震災後、海を見るのが辛く嫌だったが、今は河口に来ると娘に会えるような気がする」とM男は言う。

『娘よ 最後の場所は』という新聞記事の大見出しに、河口付近の堤防に佇むM男の写真が痛々しく添えられている。

あれから三年。被災各地では行方不明者の捜索活動が引き続き行われている。宮城県が3月12日現在でまとめた県内の被災状況は、震災関連死を含め県全体では9537人に及び、行方不明者は1282人となっている。

心と暮らしの平穏を取り戻せない人がまだたくさんいる。

今年3月11日に、石巻地方でも各地で追悼式典行われた。失った尊い命を悼み、早期復興に取り組みむ誓いを立て、震災で受けた教訓を後世にしっかりと伝えていく決意を新たにしたい。

生きていく力を得ようと、人々は愛しき人の在りし日に思いを馳せ、祈りを捧げそして自らの復興と再建を願って！

田んぼから 都会の中へ



五十嵐 晃
くりこま高原
ファーム
S55年卒
尾松出身

私が就農してから早三十年が経ちました。稲作は一年一作ですから、三十回稲作りをしたことになります。三十回の中には大冷害や病害などいろいろあり、いまだかつて満足の行く年はありません。

私は「有会社社くりこま高原ファーム」の前身「大鳥東農業生産組合」という六戸六人の協業の組織に就農しました。

その頃は私たちのような協業こそがベスト。十年後二十年後には大型機械を使つての大規模農業になるものと、夢を膨らませたものです。

しかし、世の中なかなか思うようには進まず。米の消費の低迷や価格下落、減反政策の強化など難題が立ちはだかりました。

そんな中、大きな転機になったのが、平成七年に「食糧管理法」

が改正になり、生産者にもお米の販売が出来るようになったことです。私たちも法人「有会社社くりこま高原ファーム」を立ち上げ、「お米の販売」を手がけるようになりました。

販売は未知の領域、右も左もわからなく手探りの状態で始まり、同時に販売管理と顧客管理のためパソコンを使う事になりました。

その時から地元栗駒出身者の会「東京栗駒会」の総会時の販売会に参加させて頂いたり、都会のイベントに参加したりしています。なかなか声が出なかつたり、お客様とのやり取りにまごついたり、今でも慣れることはありません。

また、ホームページを立ち上げ、会社紹介と平行して、ネットでも販売するようになりました。まさに田んぼ作業から一転、何から何まで日々新しいことを勉強しながらやっています。

前段「なかなか思うようには進まず」といいましたが、ここにきて農地を委託する人が加速度的に増えてきています。私たちの規模にも限りがあり、遠隔地や稲作り

には適さない農地はお断りせざるを得ません。あたりを見回すと山間地、未整理の農地は引き受け手がなく荒れてきています。

そんな中、各地ではその土地ならではの特産品や、昔の野菜などが見直されています。そのような地域に根差した農業ひいては産業などが進展し日本らしい暮らしになることを願っています。

「和食」が世界遺産に登録されました。若い世代も日本の食を見直してきています。

これを機にますます日本産の食材への関心が高まることを期待します。消費者一人一人が少しずついい、新鮮で体に良い日本産の食材を求めれば、日本の農業は、もつと元気になる。

そんなことを考えながら、いろんな手法で消費者にアピールしていきたいと思っています。



↑ 結城様ご夫妻。氏は料理研究家で数多くのTV番組にも出演。(HPより引用)



◆大塚商人祭りの物産会場で料理研究家の結城貢様ご夫妻と談笑の五十嵐様。【H25年10月】写真・右から、五十嵐様、結城夫人、加藤洋様、結城貢様、菅原由美子様
◀ 好調な販売の中で接客する五十嵐様。



消えない足跡を 見つめて



熊田 かほり
H15年卒
築館出身
鶴田流琵琶
鶴翔会・
鶴旺会所属

二〇一四年、二月二十二日。

雪深いシーズン只中の郷里に、演奏会のため帰省しました。

久々の里帰りでもあり、思い立って実家近くの八幡神社に一人でお参りすることに。

流石にこの時期は参拝者が全く居ないとみえ、厚く積もり凍った雪を掻き分け掻き分け参道を登り、やつとのことで本殿へ。

二礼、二拍手、一礼。

日頃の不参を反省し、頭をあげて、もと来た道を振り返ったその時。急に、ハツとした驚きと、猛烈な安堵感をおぼえて、自分の急激な感情変化に、思わずたじろいでしまいました。そして、大きくひとつ、深呼吸。

参道には私のつけた一筋の足跡のみがあり、他はもう、一面の雪景色。

決して初めて見たわけではないその光景が、私に圧倒的な安らぎを与えてくれたのです。そして同時に、何故？この足跡のついた景色に特別な感情を抱いたのか、疑問も湧き上がり、帰る道々、その心理を自己分析する過程で、〈今の己〉が見えてきました。

岩ヶ崎高校を卒業後、大学入学と同時に琵琶の道に入って、今年で早十一年目を迎えました。

日本の古典芸能である琵琶。楽器の音色に惹かれて入門したはずが、琵琶の真髄は「語り」であると師匠に諭され、否応無く入門一年足らずで語りの稽古も始め、無我夢中で練習。その時から数えても、もう十年です。

振り返ればこの間に、琵琶楽コンクールでの優勝、テレビやラジオへの出演、様々なアーティストとの共演、そして岩ヶ崎高校創立七十周年の記念公演等々……私にとっては、琵琶を通して様々な得難いものを得ることができた、幸運な二十代であったと言えます。

そして、もうすぐ迎える三十歳。これまでは、ひたすら琵琶道

の高みに近づくべく精進して参りましたが、二十代後半に入ってから、病氣、入院、手術など、それまでの若い体力に任せたがむしやらの活動が祟り、肉体的に無理が利かなくなってきたこともあり、以前に比べれば、今は活動をセーブしていると言える状況にあります。

長さ一メートル、重さ5.5kgの琵琶を毎日担いであちこちを周り、古典曲の演奏の他に、バンド活動、劇の伴奏、新曲の作詞作曲、その他さまざまな挑戦をしてきた十年間でした。

しかし、体を張って頑張ってきた私の活動の全ては、自分以外に一体誰がそれを知るだろうか。そんな不安を、時折感じていたのかもしれません。

師匠について古典だけを順当に精進する道もあるけれど、私が自ら選んだ試行錯誤の道は、一体誰が見守ってくれていて、本当に価値があるものなのだろうか？

更なるもう一つの憂い。この十年間に積み重ねてきたものは芸と経験であったが、それと反比例し

て私から薄れてしまったものは、新鮮な気持ちや、新しいものに挑戦する精神ではなかったか。病氣をしてから、そんな思いが心のかすめで行くことがあり、その度に明確な答えは得られず、目の前のことに忙殺されて時は過ぎていきました。あの日、雪の上に残った足跡こそまさに、今の私が必要としていた答えでした。人が歩み進んでいけば、当然ながら「足跡」は残るものです。

◆岩ヶ崎高校創立70周年記念芸術鑑賞会メインイベントを務める熊田かほりさん。(2011/09/30 母校体育館にて)



でも、アスファルトとコンクリートに覆われた私が住まう東京では、足跡は残りません。

既に多くの人々が歩き固めた道を、なぞって歩くのみ。そして自分の歩いた跡もまた、誰かにすぐ消されてしまう。でも、郷里の雪原は未だ道はなく、どこをどう歩こうとも自由。そして私の足跡はくつきりと確かに残るのです。

私の歩んできた十年という年月は、目には見えないけれども決して無かったことにはならないし、辿ってきた道筋も確かに在る。

一面の雪が、私にそれを示してくれました。そしてその事実にとっても心安らいだ、そんな帰省でした。これからの十年は、生涯にわたって長く琵琶を続けていくために、身体の使い方や休め方などを学んでいかねばなりません。

また、「語り」の真髄に触れるためには、三十代からの歌い込みが必要なので、こちらの稽古も盛んに行うことが必要でしょう。

やるべきことは、まだまだ沢山ある。そして私がひとつひとつ成した事は、ずっと私の背後に道と

なつて残つてゆく。そう確信できた今こそ、ひたすら前を向いて進んでゆこうと、決意を新たに三十歳を迎えたく此処に宣言し、筆を置きたいと思います。

カトマンズマラソン走る



カトマンズはヒマラヤで有名なネパールにある首都、昨年の九月、第七回カトマンズマラソンに出場してきました。なぜカトマンズマラソンかといいますと、マラソン人生も九年目になり、海外のレースに出場してみたいという気持ちで次第に募り、嘗て一九八四年から二年間青年海外協力隊員として滞在したネパールしかないという結論に達しました。

カトマンズマラソンは、5 km、10 km、ハーフ、フルの種目があり、ハーフの部にエントリー。

実はこの大会、旧知の友でもあ

るネパール陸上競技協会会長が実行委員長を務めていたことから、開催日や大会の実情等を予め知ることができました。一方で、現在のネパールは王政から共和制に移行し政治が不安定な状況が続いており、全国規模のゼネストや大会当日にもカトマンズ市内で大きなデモが行われるとの情報もあり、不安要素を抱えての日本出発となりました。ネパールに到着してみると、幸いにもデモは回避され予定通り、カトマンズマラソンは開催されることになりました。

この大会、日本でのマラソン大会と少し違うのは、車両が往来する通常の一般道路を走り、ヒンズー教の国でもあることから道の端には牛がいたりして、とてもエキサイティングなレース。

二十九年、私が滞在していた時には、ランナーというと軍隊や警察官が主でもと限られていましたが、この大会には2000名を超えるエントリーがあり、女子のランナーやご年配の方も多く見かけ、スポーツがかなり根付いていることを感じさせました。

開催日の九月二十一日、天候は雨季から乾季に開けようとしていた時で、日本の秋のような気候、ピストルが鳴りスタートです。走ってみると、いつもより少し息が上がっており、それもそのはずカトマンズは標高1300m。



スタート前に現地の旧友と語り合う長沼さん。海外でも女性に人気の厚い長沼アスリート。



uttam r sonujaya chhampiyon



सोनुजया च्याम्पियन उत्तम र सोनुजया च्याम्पियन

सोनुजया च्याम्पियन उत्तम र सोनुजया च्याम्पियन

走っている脇には車が往来し気をつけなければなりません。現在のカトマンズ、二十九年前とは明らかに違っており、市内にはビルが立ち並びどこを走っているのかさっぱりわかりません。幸いにも知人にレース中の写真撮影をお願いしていたので、バイクで誘導してもらったことは幸いしました。結果は1時間45分59秒で全体の五位、外国人ではトップの成績を収める事ができました。この大会ではテレビでの生放送されておりレース後インタビューを受け、翌日のネパールの最大の新聞「カンティプール」には私の記事が掲載されていました。

「新聞記事」
「嘗てマラソンを指導した日本人コーチ走る」
久しぶりにネパールにやっ来て、ネパールのスポーツ界の現状を見た話した。大会当日レース会場に向かう際、多くの一般市民が走っているのを見た。嘗て私が指導していた時は、限られたランナーだけだったのが、今のネパールにスポーツが浸透していることを感じた。また、なぜ、日本からネパールまで走りにやってきたかの問いには、五十歳を過ぎても走っていることを知って頂くことで一人でも多くの人に走って頂きたいから、と語った。

東京岩高会に参加して



熊谷 ふじえ
鷺沢工業高校
S49年卒
鷺沢出身
東京都
江東区在住

会員の皆様におかれましては、お元気で過ごしのことと存じます。近年、異常気象が続いており寒波到来で、東京も二度の大雪で交通網が混乱しました。故郷、栗原市（鷺沢）の冬景色を思わせる光景でしたが、生活に直結する影響を及ぼす状態となりました。昨年六月、県人会（第四十五回東京鷺沢会）で、東京岩高会の長沼幹事長から、「岩ヶ崎高校と鷺沢工業高校の再編統合に伴い両高校の同窓会が統合したので、住所を教えて下さい。」と言われた事を記憶しています。メモ用紙に同級生の松田清子さんの住所を認めたものの半信半疑（個人情報流用？）でした。何せ、鷺工同窓会から何の情報もなかったもので、統合した経緯や鷺工なのに何故、岩高同窓会に参加しなければならな

いのか、皆目見当が付きませんでした。参加者は殆ど岩高の方々と、鷺工出身者は四名でした。佐々木支部長を初め、役員の方に温かく迎えて頂き、ほとんどの方が初対面なのに、どこか懐かしい雰囲気、また、ご来賓として栗原市内にある近隣高校の迫桜高校、築館高校の方々もご臨席されていたので、違和感なく打ち解けることができました。冒頭に佐々木支部長のご挨拶とご来賓の方々からご祝辞を頂き、歴史ある学び舎の誇りと伝統を感じました。更に岩高卒業生で琵琶演奏者の熊田かほりさんの生演奏、心にビンビン響く琵琶の音色、一瞬タイムスリップしたかのような静寂な時間と感動を頂きました。また、卒業年度毎の同級生の紹介、青春時代を共に過ごした仲間との満面な笑みが印象的でした。今回、鷺工参加者は四名でしたが、これからの東京岩高会のご発展を願い、ひとりでも多くの卒業生が参加できるよう微力ながら応援させていただきます。

風流オヤジ咲く夏



岡本 浩一
S 53 年卒
岩ヶ崎出身
岡本老舗店
(岩ヶ崎六日町)

今年は、ここ栗駒も穏やかな春を迎え菓子屋を生業としている我が家でも毎日を忙しく過ごして居りますが東京支部の皆さんには同窓生同志の強い結び付き、そして地元への郷愁をこの会報を通して強く感じているところでもあります。

私こと昭和五十三年に岩高を卒業し四年間の学生生活の後、稼業を継ぐべく仙台、東京で和菓子を学び、昭和六十一年に郷里の岩ヶ崎に戻り現在に至っております。

今となつてはもう三十年程前の話ではありますが、当時、自転車での旅を夢見て居りました。限られた時間の中、北海道一周した後、列島を縦断し沖縄まで一ヶ月半程掛けて駆け抜けました。風雨に晒された日もありましたが天気の良い日など何キロもの峠を登り切った後、風の中に身を置く爽快さは旅先での心に残る風景、人との触れ合いも含め、決して色あせる事のない思い出として今も心のなか大事にしまっております。

三十年たった今、当時に思いを馳せる事もありますが、田舎ならではの、また違った楽しみもできました。そのひとつに藩政時代から岩ヶ崎に伝わっている「栗駒山車まつり」があります。

七月末に開催されるこのまつりは各町内手作りの九台の山車がお囃子を奏でながら子供たちの手に曳かれ街中を練り歩くというまつりです。我が地区では昨年「義経八艘跳び」を製作しましたが、かつてより「五條大橋」「鬼若鯉つかみ」等と物語上の名場面を好んで作っております。

山車の制作に関わって十五年程ですが、自分にとつてのまつりの原風景は、子供の頃に見た山車の上の、もの云わぬ鬼の形相の人形たち。彼等の無言の所作は幻想の物語の中へいざなってくれたことを覚えております。山車を作る側となつた今、仲間との約二ヶ月に及ぶ山車制作は悲喜交々。

しかしながら非日常の世界を作り上げる作業は愉快でもあり、出来上がったときの感動はそれまでの苦労を忘れさせてくれます。その山車が昨年「市長賞」の栄誉に輝くこととなりました。また「ダイドードリンコスペシャル日本のみつり」でその山車まつりが「風流オヤジ咲く夏」のタイトルのもと一時間番組として八月と再

放送の十二月、そして今年も五月十七日(土)BS12で全国放送されました。田舎のみつりで限られた予算、時間のなかそれなりに華やかさは増してはおりますが、人口の自然減少などまつりを取り巻く環境はかなり厳しい現実があります。とは言え、仲間達と夢中になっている大人の姿からまつりのおもしろさ地域のつながりの大切さを次の世代に少しでも伝えることができればと考えております。五月も半ばを過ぎ、ゆつくり近づく夏の気配を感じているこの頃です。



↑ 大学時代の北海道自転車一人旅のショット



↑ 平成25年、栗原市長賞に輝いた「義経八艘跳び」。
↓ 山車が一斉に揃って三迫川の大橋を渡り奉納へと向かう。



写真：土井 祐之

特集

ふるさと歴史探訪

第二節

茂庭綱元家と 岩ヶ崎領の縁



佐藤 正喜
S 40 年卒
岩ヶ崎出身
横浜在住
* 第53号寄稿を
第1節とする

戦国の終わり、葛西・大崎一揆
平定後、葛西領富沢日向直景の領
地岩ヶ崎は、伊達政宗の領地に組
み入れられた。

慶長八年には青葉城が完成し、
翌九年(1604)政宗は、北の要衝で
あった岩ヶ崎城に五男宗綱を配
し、六男宗信と二代続き、以後、
石母田氏・田村氏・古内氏・茂庭
氏と六代続き、七代目領主は、岩
手藤沢から中村氏が移り、明治維
新まで七世続いた。

■茂庭綱元と三男実元■

●「綱元君記」によれば、茂庭
綱元は「慶長五年、栗原郡三迫に
知行三百貫文賜う」とあり、その
後、六代領主茂庭大蔵恒真まで、

以下に記すように茂庭家と岩ヶ崎
領との縁が、かくも長く、濃かつ
たことに驚かされる。

【三迫の誤記と推察される】

●茂庭綱元・五十六歳は、初代
領主伊達宗綱公(二歳)の後見と
して蛭子館に居住した。城跡東端
の現在の蛭子公園である。
仙台留守居を兼ねる重職であつ
た綱元は、青葉城との往復で領民

と触れる機会も多かったと見え、
町名として残る茂庭町は、領民が
敬慕して付けたものという。

●政宗の近習だった綱元三男の
正次郎実元は岩ヶ崎城に出仕し、
知行百貫文を賜り、宗綱公、宗信
公の御膳番を勤めたという。

●岩ヶ崎での綱元は、浄土宗の
信徒香の前(政宗公の愛妾)の為
に茂庭町の円鏡寺造営、猿飛来の
青雲寺地藏堂建立、稲屋敷の阿弥
陀堂建立、更には栗原の産馬振興
の為に馬市の開設等、宗綱公に献
策し善政を敷いた。慶長年間二、

三年の間の事である。
宗綱公が十六歳で早世すると悲
観の余り剃髪して了庵と称し、高
野山に赴き成就院を再興し、祿百
石を寄付したという。

●寛永十三年、藩祖政宗公が江
戸で逝去すると、一切を投げ捨て
愛子栗生の隠居所から領地の文字
に隠棲した。家臣の遊佐采女、斎
藤孫左、土屋孫右衛門が従つたと
いう。

翌年、政宗と宗綱二君の菩提を
弔うため、廃寺だった古仙院を再
興し洞泉院を創建した。鶯澤金剛
寺の稜南和尚を開
山の祖に招いたと
いう。

本堂より回廊六
十間を造り、阿弥
陀堂(政宗公)と
妙覚堂(宗綱公)
とに日参し、読経
に明け暮れる毎日
を送り、寛永十七
年(1640)、政宗
公の命日に九十二
歳で没し、洞泉院
に葬られた。



↑ 鶴丸城跡(通称:蛭子公園)に建立され記念碑
↓ 文字の曹洞宗 洞泉院(廃寺だった古仙院を再興)



●小高い丘にある荒砥石作りの座禅像がその墓である。了庵は從臣に固く殉死を戒めたが、土屋孫右衛門は殉死し、その十日後に斉藤孫左も殉死した。遊佐采女（道海）は十年一日のごとく勤行し、慶安四年の同じ命日に没した。

綱元といい、遊佐采女といい、政宗の命日と同じ日に没したことになり、古えの武人の『自律死』とでもいべきか。

●洞泉院には、綱元坐像ほか、本堂に了庵夫妻の位牌、嗣子良元の分骨が奉納され、家臣の土屋、斎藤、遊佐の墓がある。

■綱元の外孫・茂庭大蔵茂行■

●岩ヶ崎で御膳番を勤めた茂庭実元の養嗣子になった茂庭良元の二男が、茂庭大蔵茂行である。文字を中心に三百貫文の知行地を得て、綱元の死後に家格・着座の実元を相続し、気仙郡釜谷から文字に移った。

●政宗長男で宇和島藩祖秀宗公が卒去した際には、二代藩主忠宗公の名代を勤めたくらしいの人物であったという。寛文事件では、谷

地係争の責任を捏造され、番頭召上げ・逼塞の処分を受けている。

●文字上原の山林に小高い丘があり、その中頃が平地になっている処に、高さ五尺余もある大きな自然石の墓碑が立っている。碑の表面には法名『真如院定巖禅慈大姉』が読み取れたという。茂庭家記録から、茂庭大蔵茂行の奥方の墓碑と推定されている。

■綱元の外曾孫・茂庭大蔵恒真■

●茂庭大蔵恒真は大蔵茂行の実子で、文字の知行地を継いだ。在所の折は、羽黒派宝鏡院を祈禱所としていた（文字風土記）。

●延宝九年、祖父実元、外曾祖父綱元に縁の深い岩ヶ崎に、三千石の所拝領を受け、六代目の領主に就いた。元禄七年、預り人逃亡の責を負い改易となる迄十三年間在領した。この間、貞享二年、一門の涌谷殿（伊達安芸）の孫・村元が、藩主綱村公の二姫を正室に迎える婚礼行列では、先頭を飾る貝桶添い役を勤めた（亘理家譜）とあり、藩主の信任も厚かったと思われる。

■軽部六右衛門■

●三迫川から分流し軽部堰を開削したのは、領主古内氏の頃、責任者は軽部六右衛門とされる（栗駒町史）。近年、水門近くに軽部六右衛門広場が整備され、顕彰碑等三基が保存されている。

●この軽部六右衛門は、宮城県姓氏家系事典によれば、「生没年は寛文六年頃／寛保元年、先祖は茂庭綱元の五男で軽部氏の養子」とある。

①工事の時期であるが、領主古内氏最後の年としても、逆算すると六右衛門は十五歳であり、開削工事はその後の茂庭氏が領主の頃に行われたとするのが妥当ではなからうか。六右衛門の墓（慈明寺）がある鹿島台町史では天和年間（1681～1684）としている。六右衛門二十歳の頃である。



◀ 軽部堰に隣接する軽部六右衛門広場

②綱元君記に、「茂庭綱元の五男・常元は寛永三年生まれ、のち五右衛門と改め、軽部隠岐の家嗣となる」とある。

従って、六右衛門の先祖は茂庭綱元の五男で、軽部隠岐の家嗣・軽部讃岐五右衛門という事になる。

なお、慈明寺ご住職の浅野恵一和尚の好意で入手した史料によれば、軽部六右衛門は、仙台藩平士・軽部家の五代目当主である。



↑ 三迫川水門近くの軽部六右衛門の碑

●上記①、②から、軽部六右衛門は、親戚である岩ヶ崎領主茂庭大藏恒真の招請により、岩ヶ崎茂庭町御飯屋に滞在して軽部堰を完成させたことになる。

何という縁であろうか。慶長から元禄初期にかけての百年弱の間、茂庭綱元とその子孫（実元、茂行、恒真、軽部六右衛門）が、岩ヶ崎領に大きく関わったことになる。尚、茂庭恒真の養子・**万五郎元実**は、軽部讃岐の孫、茂庭綱元の外曾孫に当たる。

茂庭一族は、栗駒、鶯沢の地に、寺院、堂宇、墓、町名、軽部川、そして肥沃な耕土を残してくれたことになる。

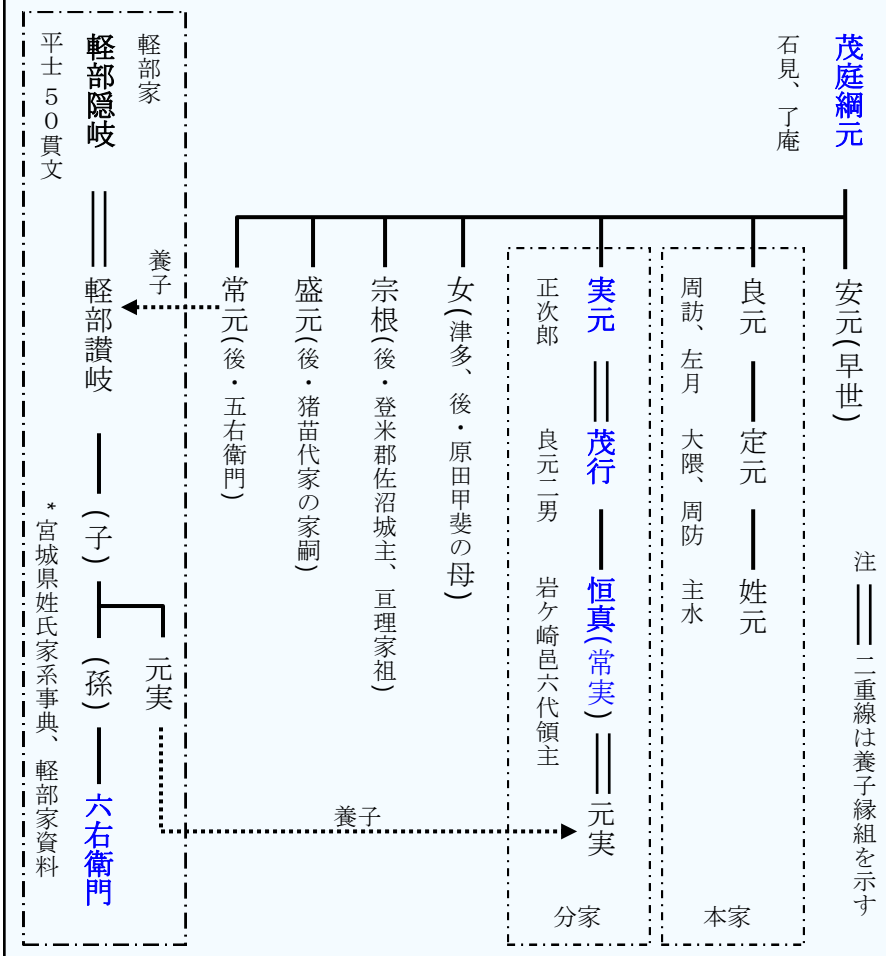
●岩ヶ崎の水門には高さ二・五メートルある「軽部川記念碑」が昭和二九年に建立されたが、軽部六右衛門が何びとたるかいつの時代か記録にないままであった。昭和五六年に、上記①、②の知見を踏まえた「恩人軽部六右衛門氏記念碑」が、軽部家十五代当主のご好意により慈明寺から今の「軽部六右衛門広場」に移設された。一部暗渠化された都市型軽部川（農水

省疎水百選）のせせらぎを聞いてることであろう。

茂庭綱元は仙台藩家格「一族」で、**武**の伊達成実、**智**の片倉景綱と並ぶ伊達三傑の一人で、**吏**の綱元と言われ、謂わば政宗の官房長官であった。伏見では、豊臣秀吉から仕官を請われて固辞すると賭け碁で勝ち、秀吉の愛妾**香の前**を

賜ったという。伏見から帰国後、政宗公に香の前を献じた翌年、伏見の伊達屋敷で長女・津多が誕生し、二年後に誕生した後の亘理宗根と共に、仙台片平丁の茂庭屋敷で、実子として育てたという。最後に理解の一助に略系図を示した。（略系図の**青文字**は、本文中に登場する人名です）……完

茂庭家略系図（岩ヶ崎関連）参照：茂庭氏系図（松山町史）他



訃報

山内常男様 (S32卒)

東京岩高会第十五代支部長を務められた山内常男様が、平成二十六年五月八日、永眠されました。

高橋 格様 (S34卒)

平成二十六年三月六日、永眠されました。岩ヶ崎八日町出身。

佐藤ちよ子先生

昭和十九年から三十八年まで母校で教鞭をとられました。平成二十五年六月四日、永眠されました。

東京岩高会に殊の外貢献された皆様の訃報は、心を痛める事無くしては聞き及ぶ事はできません。

先人の皆様方の残された足跡は、私達がしっかりと受け繋いで参ります事をお願い申し上げます。

ここに心よりご冥福を祈り哀悼の意をささげます。

東京岩高会東京支部

支部長 佐々木 くに子

顧問・役員一同

鶴ヶ鮓 駒ゆべし 季節の和菓子



岡本老舗

宮城県栗原市栗駒岩ヶ崎六日町 38

☎ (FAX) 0228 (45) 1052



代表：岡本 浩一
昭和53年卒
岩ヶ崎出身

エレクトロニクスの総合商社

昭和電子機器株式会社

代表取締役 菅原 幸二 (津久毛出身)

〒145-0067 東京都大田区雪谷大塚町9-5

TEL (03) 3728-4611 (代表)

FAX (03) 3728-4811

Eメール k@sugawara@showadenshi-kk.co.jp

POWER SUPPLIES

製造販売

---代理店及び特約代理店---

日本ケミコン(株)
オータックス(株)
日本光電工業(株)
モレックス
コーセル(株)
(株)村田製作所
松尾電機(株)
(株)オサダ
(株)フジソク
マルヤス電業(株)

その他 各種端子台

「みやぎの環境にやさしい農産物」認証

くりこま高原米

栗駒山の清流で 食味特A

農業生産法人 有限会社くりこま高原ファーム

〒989-5341 宮城県栗原市栗駒稲屋敷大尻6番地

TEL0228-45-2893 FAX0228-45-5425

URL <http://kougenfarm.jp/>



魚河岸仕込みの新鮮食材 故郷の味を今に伝える

みちのく旬鮮組

くりこまや

【住所】〒132-0021 東京都江戸川区中央4-11-1
【交通】JR総武線 新小岩駅 南口～平和橋通り徒歩15分
【電話】03-5879-5665 (江戸川高校前)
【品書】うなぎ、どぜう、旬の鮮魚、郷土料理、創作料理、
【代表】千葉 正宏(S48年卒・岩ヶ崎出身)





新しい風、上野へ。

本場上海から、話題の美食先進スタイル上陸!

中国伝統料理に、フレンチ、イタリアン、和食、薬膳などのテイストや
いままでにない発想を取り入れた、新感覚の中国料理 ニューベル・シノワ。

編集雑誌帳

命燃えて 荻野吟子

埼玉県北西部の熊谷市妻沼とい
う小さな町でのお話です。

時は嘉永四年(1801)、日本の女
医第一号として知られる荻野吟子
は妻沼の名主の五女として生まれ
た。十八歳で熊谷の名家に嫁いだ
が重篤な婦人病で離婚した後、順
天堂醫院で治療を受け、退院後は
実家で静養する。これが基で、女
性にとつては何ものにも耐え難い
屈辱の診療が、同性の人々に自分
と同じ思いをさせてはならない
と、長い静養中の吟子に医師にな
ることを強く決意させた。

後に吟子は二十八歳で東京女子
師範学校を首席で卒業し私立好寿
院医学校へと医師への道を進む。
しかし当時は男性中心の社会で
あり女医の制度もなく、女性ゆえ
に開業試験もことごとく却下さ
れ、吟子の医師への道は万策尽き
たかにみえた。そのような中で最
後まで吟子を支え続けたのは同郷
の友であった。吟子の医師への強
い思いが支援者の間に広がり、埼

玉県、東京都、内務省への働き掛
けを通じ女人禁制の医師への道を
拓いていく。明治十七年、医術開
業試験で女性四名の受験者の中か
ら吟子ただ一人が合格し三十五歳
にして女医第一号が誕生した。

東京の本郷で診療所を開業した
が「女に医者ができるか」と世間
からの酷評を浴びながらも、病氣
の治療における女性には屈辱的な
施術や医学の世界を改めるべく、
医師の道をひたすら突き進んだ。

吟子は同胞からの思いや、配慮
を欠く医療行為を受けた女性の無
念の涙に支えられ、やがて日本医
学会に燦然と輝く女性医師の先駆
者となる。吟子はキリスト教の布
教や婦人運動の中、新島襄から洗
礼を受けた志方之善(24歳)と四十
歳の時に再婚し、夫の原野開拓に
伴って渡道の折りにはアイヌ民族
差別解放運動にも加わった。やが
て吟子五十四歳の時に夫志方を亡
くして三年後に東京に戻り、本所
(墨田区)に医院を開業し姉と養女
と穏やかに暮らす。その五年後に
脳卒中で倒れ大正二年六月二十三
日、六十三歳で生涯を閉じる。

妻沼の吟子生家跡に建つ記念碑
には、友を愛し 友に支えられ学
びを求め 命を尊び 医の道を拓き
命燃えて生きた吟子の愛唱の聖句
が刻まれています。………編集人

己の命を捐つるは

是より大なる愛はなし

聖書ヨハネ伝第15章第12節の句。
吟子はこの句をすべての女性すべての
母親すべての人に捧げています。



熊谷市立荻野吟子記念館に展示されて
いる吟子(本名・ぎん)の肖像画。
渡辺淳一の小説「花埋み」を基にし、
吟子の生涯を題材にした舞台演劇のパン
フレット。(1998年 主演・三田佳子)

